

子どもの貧困対策としての学習支援に関わる 大学生ボランティアの語り

立命館大学大学院 伊原千晶

(特定非営利活動法人きょうとNPOセンター)

本報告の課題

この報告は、近年全国で急増している、貧困世帯の子ども向けの学習支援活動に重要な担い手として関わる大学生ボランティアの語りを分析することで、学習支援の政策的位置づけである「教育保障」の制度的破綻と、大学生ボランティアに求められてきた「ロールモデル」としての役割の限界を指摘することを目的とするものである。

学習支援活動が急増した経緯・背景には、以下のような流れがある。まず、阿部彩（2008）や、子どもの貧困白書編集委員会（2009）などにより、2008年頃から、貧困世帯で暮らす子どもの実態が可視化され、問題視されるようになり、大学生や、公務員の有志などによって貧困世帯の子ども達への学習支援活動が草の根的に広がっていった。その後、2009年には学習支援活動が生活保護受給者への「自立支援プログラム」と位置付けられ、全国の都道府県・市町村で生活保護受給家庭の子どもへの学習支援が国の予算のもと行われるようになり、さらには、2013年、子どもの貧困対策法が制定され、自治体主催、民間団体主催を問わず、学習支援活動はさらに増加を続けている。

学習支援活動は、「生活保護受給家庭の子ども達の高校進学率が低い」という問題意識と、「貧困の連鎖を断ち切るために高校に進学してほしい」という願いから草の根的に展開されていったものの、それが制度化されることで、事業の社会的な位置づけや、求められる役割も少しずつ変化していった。

そのような学習支援の「現場」に目を向けると、運営形態の違いを問わず、大学生をはじめとしたボランティアが講師役を担い、子どもと関わるが多い。しかしこれまで、子どもの貧困・学習支援に関する先行研究は、子どもの高校進学率の上昇や、学習に対する態度の変化、自己肯定感の向上など、学習支援に参加する子どもの変化や成長に焦点を当てたものがほとんどであった。事業の担い手である大学生ボランティアに関しては、実践紹介レベルの言及にとどまることが多かった。その中で、大学生ボランティアは子ども達にとって「身近なお兄さん・お姉さん」とであるとされ、「ロールモデル」としての役割を果たす(ことを求められる)という意味づけがされてきた。しかし、これは本当にそうだろうか。たとえば、事業の性格は多少異なるものの、酒井朗ら（2007）は、商業高校生に対する進学支援を行う大学生・大学院生ボランティアの成長過程を描いており、①「普通の子」という捉えからの再構成、②「関わり」をめぐる悩みや葛藤、③「組織」をめぐる葛藤、④葛藤の先にある学びと成長、というプロセスを抽出している。本報告では、大学生ボランティアに関する分析をさらに掘り下げるべく、大学生ボランティアが学習支援活動に参加した契機や、活動に関わるものの意味をどのような言葉で意味づけているのかに迫り、その実態を明らかにすることを試みたい。

方法

学習支援活動に参加している大学生ボラン

ティアの参加動機や、活動の中での経験などを問う、半構造化インタビューを行った。関西地方で学習支援活動に携わるボランティア7名に協力を得た。調査時期は「子どもの貧困対策法」の制定以前の2012年11月～12月であり、当時は、学習支援活動が子どもに対する直接支援の中心的な事業であった。インタビューはそれぞれ60～90分程度、インタビューデータは文字起こしを行い、サトウタツヤ（2009）が提唱するTEM（複線経路・等至点モデル）を用いて分析を行った。

分析結果および考察

まず、大学生ボランティアが学習支援活動に参加したことにより得られたと感じているものは、①居場所の獲得、②経験値が上がる、③問題意識が育まれる、④進路の強化促進、であった。

学習支援活動への継続的な参加は、他のボランティアや子ども達に承認されることにより担保されており、また、かれらとのかかわりの中でこそ得られる経験があるという語りが見られた。その中で、学習支援や子どもの貧困問題に対する問題意識も育まれるようになり、卒業後の進路を考える上で大きく影響を受けた大学生ボランティアもいた。

また、大学生ボランティア達は、学習支援活動を「自分自身の居場所、所属」であると意味づける傾向があることが明らかとなった。このことから、現在の学習支援活動の運営は、「自分には何かが欠けている」「自分の居場所がほしい」といった、大学生自身の「心の貧困」によるモチベーションに依存した運営形態であることが示唆される。

「貧困の連鎖を断ち切るための学習支援」といわれるように、本来、学習支援活動は教育保障の理念をもとに制度化されたものである。にもかかわらず、学習支援の重要な担い

手である大学生ボランティアのモチベーションは、「貧困の連鎖を断ち切る」という理念よりも、「いま・ここ」にいる子ども達に対する共感的な理解（見立て）や、「勉強を強制しない」という空間づくりを通して、子どもも大学生ボランティアもありのままに受け入れられる「居場所」を確立することに置かれていた。大学生ボランティアは、子ども達にとって「身近なお兄さん・お姉さん」であるとともに、「ロールモデル」と位置づけられ、語られてきたものの、大学生ボランティアの意識はその点に向けられていなかった。先述のように、子どもの貧困対策＝学習支援という色合いが強かった当時でさえも、「ロールモデル」と「居場所」という並列的な言説が混在していたことが分かる。当時からすでに、学習支援活動は大いなる矛盾を孕んでいたと言えるのではないだろうか。

参考文献

- 阿部彩、2008、『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波書店。
- 子どもの貧困白書編集委員会編、2009、『子どもの貧困白書』明石書店。
- 酒井朗編、2007、『進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房。
- サトウタツヤ編、2009、『TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして』誠信書房。
- 建石一郎、1989、『福祉が人を生かすとき—ドキュメント「落ちこぼれ」たちの勉強会』あけび書房。